

地理教材としての地形圖 (第十八)

大 阪 市 街

主要地圖 一萬分一 地形圖大阪近傍

五萬分一。大阪西北部、西南部、東北部、東南部

大阪市街の人文地理的意義を明かにするためには、一萬分一の二度刷の美はしいのを参照せられることを御すゝめする、五萬分一圖幅では丁度大阪市街の處が隅に當るので十字形に切斷されてゐるから、糊で繋ぎ合はさねばならぬ、且又あまり鮮明でない恨がある、しかし大體に其形はわかるから五萬を對照して本文を読んで下さい。さて大阪市街圖を熟視して第一に氣のつくことは大阪の中央心臟部である所の船場、島の内の區劃の正しくして且廣いことである、東横堀と西横堀、土佐堀川と道頓堀川との間の東西約一千米南北二千六百米の矩形の地は見ても氣持のよい約八十米宛の正方形の街路が引い

てある。それから西横堀川から西の方木津川迄幅約千三百米の地域は土佐堀に並行して、江戸堀、京町堀、阿波堀、立賣堀、長堀、堀江、道頓堀と凡そ七筋の運河が横走してゐる、寛文頃の海岸圖を見るとこれらの運河はすべて海港としての船舶の引込線で北にまだ安治川の無い時分これらの運渠は外國の河港に見受けるドックの役目を果してゐたのであるが、この部分の土地區劃は幾分これらの運渠に妨げられて西横堀以東のごとく正方形の町並になつてはゐないけれども凡そ八十米を單位に區分してあつて下船場といふ名の示めすが如く、船場の附屬港區ともいふべき形である。

蓋し大阪の歴史を調べて見ると以上の區劃及運渠の完成は元和寛永に亙るのであるが東西横

堀、土佐堀、阿波堀、道頓堀のごときは豊臣秀吉が天正十一年に大阪城に入つてから後、秀頼の滅亡に至る間に出来たものである、換言すれば大阪市としての最初の都市計劃者が秀吉の命を受けて立案したものであるらしい。秀吉の大阪城は東横堀から東大和川全部南空堀に擴がつてそこに一の丸、二の丸、三の丸、と三重に取圍んで作られたのであるが、其時の大阪人民の住宅商業區は東横堀以西にあつた事は疑のない事實である、そこで、船場、島之内を其本據として下船場に運渠を入れて通商に便じ、同時に中之島の北天満區にも（慶長三年）天満堀を通じることとしたのであつた。當時は大阪三郷と唱へて天満、北、南の三組であつたところ、やがて豊臣氏が亡びて徳川氏の天下となるや、大阪城代として松平忠明がこゝを領することになつて、既に焼け盡くしてゐた大阪城を再建したが、今度は規模を小にして、豊臣時代の三の丸を全部市街地として伏見の町人をこゝに移住させた、同時に伏見の町人で京町堀を掘つてその沿岸に

移住したのもあつたが、さてこの徳川時代になつて出来た新しい都市の區劃は豊臣時代の區劃とは違つた尺度を用ひたのであつた、よく地圖を見ると船場邊の八十米正方形の一邊は半町のつもりで、一丁目といふのは其二つを合せてある、則ち百六十米で一丁目となつてゐるが、之を京都市などに對照すると京都市は百四十米が一町で約六十間を一丁目として、東西の通とし半町三十間ごとに南北の縦の通があるから正方形になつてゐない。併し大阪は八十米即四十間平方の區劃である、こゝが秀吉の都市計劃の前人の跡を踏襲せなかつた妙所であつたのであるが、松平忠明はその事實を無視して、三の丸や京町で、京都風の六十間に三十間の矩形の町割を施した、これは伏見の町民が移住したから、京都の都計をそのまま輸入した爲であつたかもしれぬが、石町釣鐘町平野町あたりの區劃を見ると東横堀以西に比して、いかにせよこまじいかゞ明瞭になる。北方天満組の方は豊臣氏以前の古い町割に従つたと見えて其町幅全く京都式

で、船場島之内の雄大さが無い、しかしこゝで松平忠明の都計に一つ賞讃すべきものがある。それは秀吉が京都市の都計をたて、御土塀をつくり、洛中の寺院をすべて東京極に集中した故智に従つて元和三年町割を行ふや大阪市中の寺院をすべて市の一方に追ひよせたことである、其一つは天満の北にある寺町、及天王寺附近にある數條の寺町通である。これは地圖の上に明に一線を引いてゐて寺街の特色を顯はしてゐるからよくわかる、蓋しこの天満の寺町は大阪の北端で今の梅田驛がその當時寺の背後の墓地であつたことなどによつて北の限りを示めし、東はこの天王寺の寺町でもつて都市の境としたので西は當然今の木津川まであつたのであらう。

従つて地圖を見ると寺町から木津川までの間は誠に市街らしく一定の計劃に基いて條里の行届いたものがあるのを知るのであるが、其後周圍の隣接町村が大阪市に入るに至つて過去の町村の亂雑な道路の形式をそのまゝに大阪に編入したので天満の寺町の北から西へかけての一區

域及道頓堀から南へかけての區域は街路横斜廣狹、屈曲、全く以て統一がない、これは餘程面白い現象である、蓋し明瞭な都計を建つること、秀吉又は忠明の如き政治家が居ないでたゞ無暗に近隣を併合した趣がよくわかると思ふ、従つて運渠の系統の如きも木津川以西は支離滅裂の趣がある、たゞ今度愈大都市になつたので今宮から南、關西線以南の空地に於て新たに六十間平方の町割を行ふてある所が著しく目立つのみである、そこで大阪には、その開關の時に施した四十間平方の町割と、第二次の京都市矩形、第三次の近隣町村の地方的町割、第四次の六十間平方といふ四通りの町並が出来たのである、之を町の中樞なるものは往々規模狭小で、周圍程漸次都合よくなつて行く所の海外の都市倫敦、巴里などに對照すれば、中央が尤も規則が正しくて其周圍ほど却つて退化してゐるといふ、大阪市の如きは都市の膨脹の稀に見る悪例ではあるまいか、今度出来る大阪市都計の大道路も依然この歴史に従つて、中央部には縦横の直條大

路が基盤形に出来るが、安治川以北木津川以西、道頓堀以南に至つては自から規格を破つた曲線大路や星條大路が出来ることになつてゐて何だかたよりない趣が見える、蓋し今にして秀吉の偉大さを思ふの感がふかい。

最後に大阪市街圖を見て面白いと思ふのは、船場島之内の中樞部には少いが、下船場などをよく見ると町割の中に道路が行きつまりになつたのが非常に多く目につくことである、これは袋町であつて東洋風の市街では甚だ多く見られるもので交通の不便を敢て意としない悠長な氣分の發現だとも考へられるのであるが、實はこれは經濟上の現象であつて、かやうな住居を上方で廊子住居ロウジズミといつて、表住居オホテマシから區別されてゐる、地圖には出てゐないけれども、船場、島の内の盛り場といへども町の間に一間廊子や二間廊子ロウジが設けてあつて、そこに入ると往々九尺二間の小さい住宅が數戸櫛比してゐるのが例である、しかし今日の大阪はかやうにして町家の裏の空地を極端に制限しても猶人口の收容が出

來ないから、愈西洋風に二階三階と立體的に住宅を昇して行く氣運に向つて來てゐる、これ又世態變遷の一現象といふべきであらう。(藤田)

談叢

阿蘭陀木綿

鶴岡學人

大正十四年十一月廿三日北河内郡門真村に伊達醫院を訪ねた、同家は地方きつての名門、十三代つゞいて醫者の家で當主葛岡氏は目下京都府立醫大に在學中とのことであるが後見人として伊達富士雄氏が醫院を開いて居られる。

系圖の正しい名家であるからに其の家屋敷も中々立派なもので大和屋根の西方の切妻が白壁にしてあつて、東の方は破風作りになつた古色蒼然たる母屋がある、入つてみると母屋の天井は下から梁木が見えて普通の天井のやうに梁